



AET1 & OSM1

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB

Asian and Middle Eastern Studies MPhil by Advanced Studies

---

Friday 24 May 2019      13.30 – 15.30

---

### Paper J7

#### Literary Japanese

*Answer **both** sections and **all** questions.*

*Write your number not your name on the cover sheet of **each** answer booklet.*

#### STATIONERY REQUIREMENTS

*20 page answer booklet*

*Rough Work Pad*

#### SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

*None*

**You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.**

## SECTION A

- (1) Translate the following passage from a **seen** text into **English**. [35 marks]

むかし、おとこ有けり。そのおとこ、伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親おや、「常つねの使つかひよりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親の言ことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝あしたには狩かりにいだしててやり、夕ゆふさりは帰かへりつゝ、そこに来させけり。かくてねむごろにいたつきけり。二日と

Question 1 continues ...

いふ夜、おとこ、「破れて逢はむ」といふ。女もはた、いと逢はじ  
とも思へらず。されど、人目しげければ、え逢はず。使ざねとある  
人なれば、とをくも宿さず。女の閨近くありければ、女、人をしづ  
めて、子一つ許に、おとこのもとに来たりけり。おとこはた、寝ら  
れざりければ、外のかたを見出だして臥せるに、月のおぼろなるに、  
小さき童を先に立てて、人立てり。おとこ、いとうれしくて、わが  
寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも  
語らはぬに、帰りにけり。おとこ、いとかなしくて、寝ずなりにけ  
り。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしやらねば、  
いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のも  
とより、ことばはなくて、

126 君や來し我や行きけむおもほえず夢か現か寝てかさめてか

Ise monogatari, SNKBT vol. 17, pp. 144-145.

(TURN OVER)

Page 3 of 6

## SECTION B

(2) Translate the following passage from an **unseen** text into **English**.  
The headnotes are for reference only. [65 marks]

七 → 四五六べー注五。  
八 天より落ちてきた火の玉。隕石  
か。

### 第十 本山のみねに天火おつる事

九 底本「ぎたに」と傍訓。現、大阪府高槻市萩谷。靈仙寺村の北にあり、芥川の支流萩谷川の河谷に位置する。「萩谷(はい)神祠、萩谷(はい)村」にあり(摂津名所図会)。二〇「漁る」。探し歩く。獲物を求める。

二 「抱え」の変化した語。  
三 光り輝くさま。

ほんざんの近辺に萩谷といふ山家あり。そこなる人ただひとり夜こうにいでたり。しばしあされども、たぬきの床にも尋ねあはず。高ねにいこふて烟草などたうべしに、西のかたよりものなるをとおびただし。しばし有て長き一町もやあらん、ふとさも二腕ばかりの天火なり。其左右にまりほどなる火とんで、さらにかぞへがたし。光り爛熳として、あたかも白昼のごとし。とどろきて本山のみねに落たり。炎よもにちる事五六町もやあらん。おちて響やまず。三十町ばかりへだてしわがゐる

Question 2 continues...

三「鬨」。合戦で、戦闘の開始を告げるために発する叫び声。  
四「帝釈」。梵天と並び称せられる仏教の守護神。須弥山の頂上の中の喜見城に住む。阿修羅を征服し、悪行をこらしめ、善行を喜ぶ、大きな威儀を有する王。  
五「阿修羅」。古代インドの鬼神。八部衆の一。常に帝釈天と戦つてゐる悪神。  
六「多聞天」。→四五七注一八。

やまも地震のごとし。さてしづまるよと見るに、二三千人の声して、ときをつくる事、をしかへして三度せり。山彦やまびここたへて、  
一三めざましきありさまなり。おそろしなんどいふばかりなし。一四た  
一五いしやく、あすらの戦たたかいごとく、てんぐどちのあらそひにやらん。また寺ちかけれども、心なき身の、ただかりくらしぬる  
一六我にしも、かしこくもしめし給ふ、たもん天のつげにやと、日ひ來ころにあらため、これもかりをやめけるとなり。

*Otogi monogatari*, SNKBZ vol. 64, pp. 458-459.

(TURN OVER)

Question 2 continues...

### Vocabulary (question 2)

ほんざん=本山= the Honzanji (temple)

夜こう=夜行=night work (in this case hunting)

床= den

尋ねあふ=出会う

いこふ=休む

たうぶ=「飲む」「食ふ」の謙譲語

二腕=二抱え=「抱え」は両手でかかるほどの大さを示す語

とどろく=音が荒々しく鳴り響く

よも=四方=東西南北

やむ=止む

へだてし=離れた

しづまる=静まる

をしかへす=繰り返す

山彦=the echo in the mountain

めざまし=あきれるほどだ

たいしゃく=帝釈天 = the God Taishakuten

あすら=阿修羅 (あしゅら)

てんぐどち=天狗同士

心なし=cruel, heartless

かり=狩 (hunting)

たもん天= the god Tamonten (one of the four guardians)

つげ=告げ=divine message

日来にあらため=日頃の行為を改め

**END OF PAPER**

**Page 6 of 6**